

舞踊の構造・機能と要素化(Ⅳ)

—モチーフと作品化—

松本千代栄
安村清美
宗京洋子
櫻井益子

I 研究目的

本研究は、先行研究⁽¹⁾の追跡研究として、舞踊運動形成とイメージの連関関係を検証しようとするものである。

先行研究結果の7種のMotiveから1種を選択し、その原型(寂しいMv)を変形して2種の作品化(A:より優しさの方向へ、B:より活力を含む方向へ)を試み、作品の成立と、変形の方法による作品の感情価(鑑賞価)の差異性・同一性を検討しようとするものである。

II 研究方法

1. 実験作品の創作 作・演:お茶大院生H・M

2. 感情語の選択及び、題名、感想の自由記述

対象:お茶の水女子大学舞踊教育学科学生55名

実施:①各作品の収録映像を映写し、連想した「舞踊主題」の自由記述。(時間5分)

②Check List⁽²⁾の感情語を確認の後、各作品を映写し、該当すると思われる3語(順位1・2・3)の選択。

③各作品から受けた印象・感想の自由記述。

III 結果と考察

1. 〈感情語の選択〉—表1

①作品Aは“流れるような”群(やわらかい、やさしい、流れるような、優美な、華麗な、暖かい)の、作品Bは“躍動的な”群(躍動的な、迫力のある、大きな、歓喜の、勇壮な、生命感あふれた)の選択が第一位であり、各々異なった感情語と結びついている。

②両作品とも、①の最多選択語群と次点の群との頻数差の検定結果は、危険率1%未満で有意差が認められた。

③作品化の原型とした“寂しいMv”の感情の質を、両作品とも、ほぼ同等に保持している。

表1 感情語の選択 F-Quality

代表語 感情語の群	A				B			
	1位	2位	3位	合計	1位	2位	3位	合計
寂しい	1	0	0	1	3	3	9	21
流れるような	32	34	32	98**	196	0	0	0
寂しい	13	12	10	35	73	9	8	7
さりげない	5	3	2	10	23	0	1	0
賑やかな	3	5	8	16	27	3	7	8
躍動的	0	0	0	0	0	9	6	10
躍動的な	1	1	2	4	7	30	23	19

(重み付けた得点は、順位1, 2, 3位に3, 2, 1点を与えた) N=55
 (最多選択語群の頻数と次点との差の検定 **p<.01)

図1 作品構造

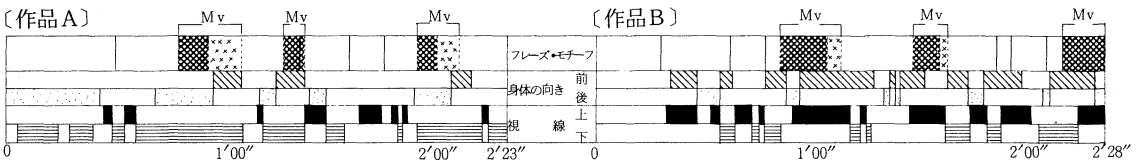


図2 モチーフの分析・手足(右)と床の距離

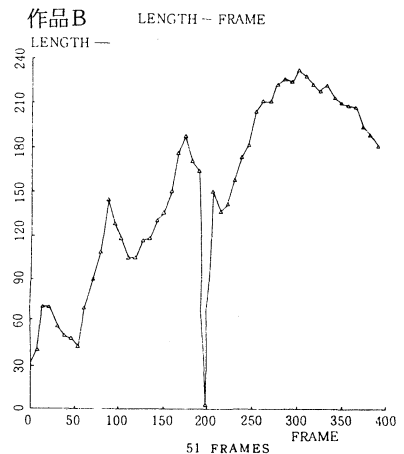
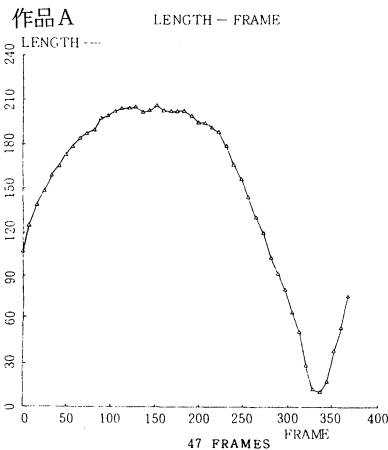


表 2

	作 品 A	作 品 B
作者のフレーズ	○比較的長いフレーズ	○短いフレーズ
モチーフと全体性	○後半に向けての緩徐な短いたみ込み ○包み込むような腕の使い方	○下降よりも時間をかけた上昇 ○様々な方向に屈曲する上昇
身体 の 向 き	○なめらかな上昇と下降 ○モチーフは3回出現	○モチーフは3回出現
視 線	○後向きが多い ○ゆっくりとした変化 ○変化が少ない	○前向きが多い ○切り換えが多い
出 と 入	○下向きが多い	○上向きが多い
モチーフと全体性	○背面・うつむき・立 → うつむき・座 ○なめらかなモチーフが、全体のゆっくりしたテンポの中に自然に溶け込んでいる。	○伏臥・小さな固り → 上向き・伸身・立 ○モチーフの上昇の屈曲した連続が際立ってくり返され、全体の中のアクセントとなっている。
全 体 印 象 (鑑 賞 価)	「砂をすくいとってもすくいとっても指のすきまからこぼれ落ちていくような、暖かい心の中はほんの少しの寂しさがかいま見えるような、そんな感じを受けた。」	○「表面的な迫力だけでなく、内部に秘められたエネルギーも見えるようだった。」 ○「手をねじりながらあわせて動かすところが心の葛藤をあらわしているよう。」

2. < 作品分析 > — 図 1・2, 表 2

表 2 の通り、保持的と転換的、内向性と外向性等、対照的な特性を示し、モチーフと全体の関わりと合わせ、作品を異なる二方向に形成している。

3. < 舞踊主題の連想 > — 表 3

作品 A, B ともに主題は 250 語をこえ、連想は円滑に行われたと認められる。

主題連想の傾向について各々の特徴をみると ;

① 作品 A では「想い」「秋」「静かな…」「女」に代表される内包的な寂しさと慕情、「流れ」「風」に代表される流動感、「春」「暖かい…」に代表されるやさしさ、あたたかさが認められる。

② 作品 B では第一の「生」への集中が特徴的で、「芽ばえ」「わきでる…」とともに生命感あふれる主題が多く認められ、また「旅立ち」「目覚め」などの内発的覚醒感を表わすものが多い。

作品 A, B の 10 位までの主題には共通した語は出現せず、作品傾性の明らかな差違を実証しているとみられよう。

表 3 舞踊主題の連想 (第 10 位まで) N=55

作品 順位	A 計(295)	B 計(258)
1	遠い昔に思いをはせて	わきおこる生命
2	春の朝	未知へ旅立つとき
3	流れるままに	目覚め
4	透きとおった風、大地をそよぐ	はるかなる大地
5	やさしさ	吹き出す芽の行方
6	静かな晩に	明日への叫び
7	秋の葉の舞いおちるなかで	少しずつわきでる力
8	悲しみの女	心の葛藤
9	暖かい日ざしの中で	解放
10	花の海で	私の革命

(下線部が各順位に共通の語)

4. < 感想文の文章分析 >

感想文を〔W-Fv〕類〔B-M-Fv〕類に分類した結果、

① 表 2 “全体印象” に示したとおり、作品 A は作品全体と鑑賞価の連合が、作品 B は身体・動き (特にモチーフ) と鑑賞価の連合が強いことが認められる。

② 内容的にみると、A は『ほのかな透明な暖かさ』と共に『憂いや寂しさ』を感じさせる作品、B は『生命や希望が生まれてくる』と共に『束縛から開放されたいと抵抗している』とも受けとめられ、両作は異なる作品化の方向をもちながら、それぞれの中に、“暖かさ—寂しさ” “生—内面の葛藤” と対比的な情調が読みとれる。

IV 総 括

① “寂しい Mv” の原型を保ちながら 2 方向に変形された作品は、その変形の方向づけにしたがって異なった鑑賞価をもつ作品と評価された。即ち “モチーフ” として成立しているとみられる。

② モチーフが融け込んでいる A は、「自然な感じで常に流れている印象」⁽³⁾ のなだらかな融合の作品となり、モチーフが際立った形で位置づけられている B は「苦しいことに耐えながらも伸びていこうとする力強さ」⁽⁴⁾ という相剋と融合をもつ作品と受けとめられた。

即ち、モチーフと全体の関係が作品形成の骨組を作り、その関わりによって作品の構造特質は変形し、作品の鑑賞価 (連想語の質と広がり) を異方向に方向づけるとみられよう。

- (1) 「舞踊の構造・機能と要素化Ⅲ」松本他、第 35 回日本体育学会、1984。
- (2) 先行研究に基づき選定された 42 語の感情語。
- (3)、(4) 感想の自由記述より。